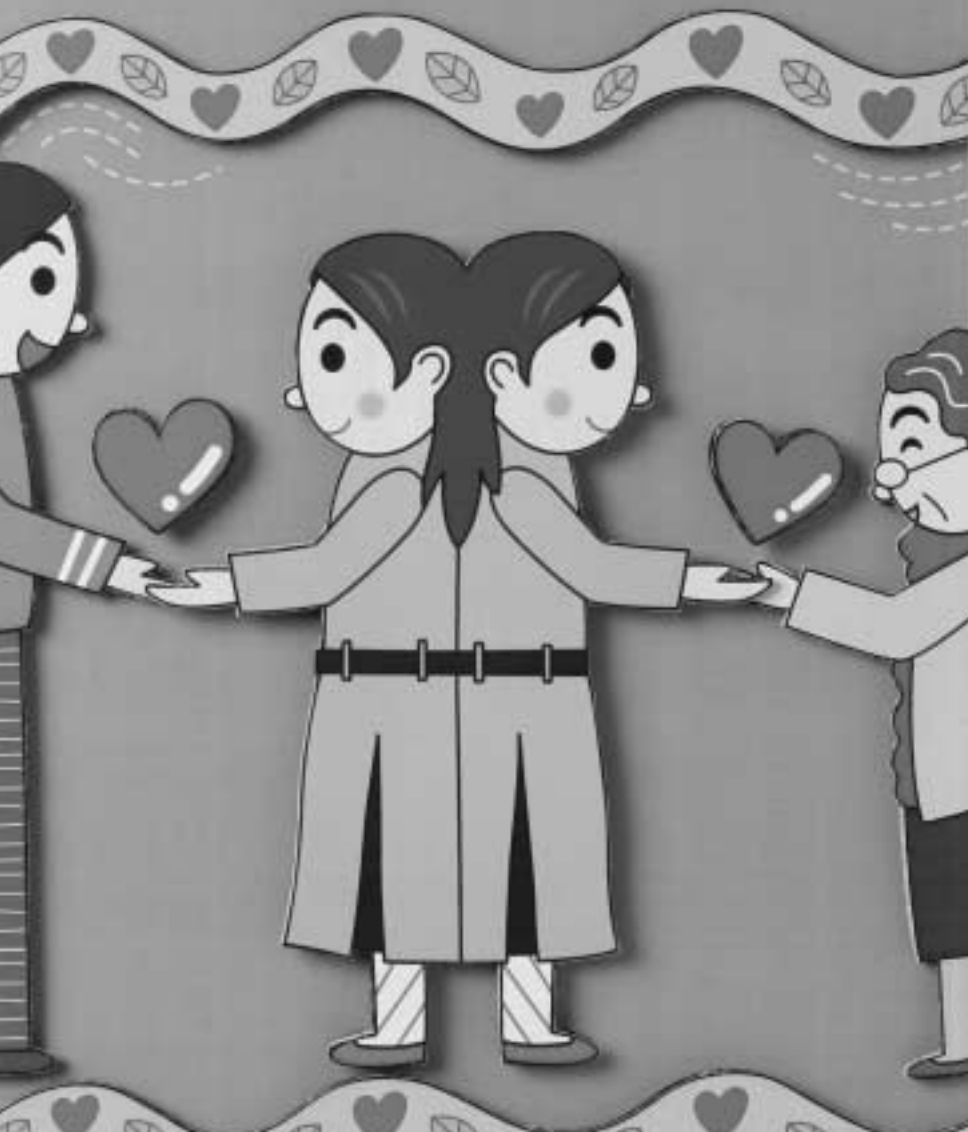


# 善意は<sup>めぐ</sup>巡る



振り向けばお世話になりし人ばかり

この句が示すように、私たちの生活を振り返ってみると、多くの人々の善意と親切によって支えられています。親や恩師、友人や隣人は言わずもがな、一度だけ出会った人々から受けた善意や親切も数え上げればきりがありません。

今月号では、広く社会を巡っている善意や親切に対して、どのようにこたえればよいのかを考えます。

## 見知らぬ人の親切が

東京に住む大学生の佐藤健太さんは、夏休みを利用して一週間の予定で、ミク

ロネシア諸島にあるパラオ共和国に旅行をしました。珊瑚礁に囲まれた大小二百の島々からなるパラオは、世界有数のスキューバダイビングの拠点として有名で、以前からパラオの海に潜つてみたいと思っていたのでした。これまでも海外でダイビングを数回経験していたので、パラオでの宿泊先や予定は特に決めず、パラオ到着後にホテルを探すことにしてい

ました。

健太さんは期待に胸を膨らませ、パラオ国際空港に降り立ちました。〝予想していたよりも小さな空港だなあ〝と思いつつ、入国審査を終えてロビーに出たところ、宿を探すために当てにしていたツーリストインフォメーション（観光案内所）は閉まっていた。そこで、タクシーを捕まえようと空港の外に出た健太さんは、思わず立ち尽くしました。

〝タクシーがない……〝

空港前の小さなロータリーには、地元の人を迎えに来たような車とツアー客用の送迎バスしかありません。しかも、これらの車は、健太さんが戸惑っているうちに次々と発車していきました。

仕方なく空港ロビーに戻った健太さん

でしたが、空港内は人影もまばらで、だれに助けを求めていいのかも分からず、急に心細くなっていきました。



「どうしよう……。事前にもつと調べておけばよかった。このままロビーの椅子で明朝まで過ごすしかないかなあ」



しよんぼりとうつむいていた健太さんに、男性が日本語で「何かお困りですか」と話しかけてきました。それは入国審査後に、手荷物を渡してくれた空港職員でした。その人に事情を話すと、「もう少しで仕事が終わるから、ちよつと待っていて。ホテルを知っているから案内してあげるよ」と言い残し、カウンターのほうへと去っていきました。

三十分ほどで仕事を終えた空港職員がカウンターから戻って来ました。そして、彼の車で市街地へと送ってもらう車中でのことです。

「日本語が話せるんですね。どこかで習ったんですか」

「以前、大阪の大学に留学していました」  
「そうだったんですか。でも、たいへん

助かりました。タクシーもバスもなかった。今夜は空港で寝るしかないと思っ  
ていたんです」

「あなたの困った顔が見え、もしかしたら日本人ではなかったのです。留学中のホストファミリー（受け入れ家族）の人たち、私にとっても親切してくれました。だから、困っている日本人を、そのときのことを思い出して、助けてあげたいって思うのです」

彼の日本語はどことなくぎこちないものでしたが、その後も会話が弾み、二十分ほどで紹介してもらったホテルに到着しました。健太さんは、出国のときにあらためてお礼をしようと想着て、簡単なお礼だけで別れました。

ホテルで宿泊の手続きを済ませて、

ベッドに横たわると、健太さんは疲れからすぐに寝入ってしまった。



# 激しい スコールに 見舞われ

翌日からは、念願ねんがんのスキューバダイビングやジャングルトレッキング（密林歩き）ツアーなどに参加し、楽しい時間を過ごしました。

帰国前日には船で一時間ほどの島で潜ることにしました。そこはパラオでも有数な潜水の場所。水中ではナポレオンフィッシュやバラクーダーなどの魚の群れが泳いでいました。

ダイビングを満喫まんきつし、海から上がって

帰ろうと思っていた矢先、熱帯特有ねつたいとくゆうの激しい雨風のスコールが始まりました。すぐにやむと思われていたスコールは治まる気配けはいがありません。港で天候てんこうが回復するのを待っていた健太さんのもとに、帰りの定期船ていきせんが欠航けっこうするという知らせが来ました。

「今日中に帰らないと明日の早朝の帰国便に間に合わないし、帰国便を変更するお金も残っていないし……」

事情を説明して、定期船を出してくれるように何度も頼たのんだものの、天候が回復する兆きざしはなく、欠航はくつがえりそうにありません。

強い風と激しい雨の降り続く空をぼんやりと眺めながら、健太さんは途方とほうに暮れました。

# 日本人から 親切に してもらった

「船を出しましょうか。私の船なら悪天候でも大丈夫ですから」



突然、港の待合室で流暢な日本語で老人に声をかけられました。

思わぬ申し出に驚くとともに、まさに渡りに船で、健太さんは老人の船に乗せてもらうことにしました。

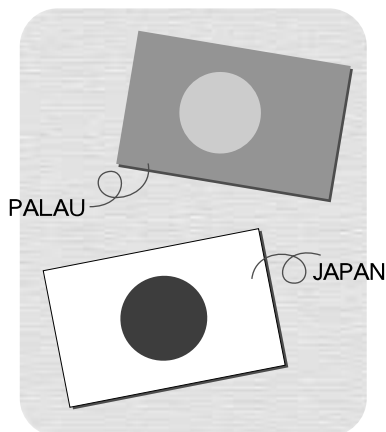
出港してからしばらくして、老人はおもむろに口を開き、健太さんに日本人との思い出を話し始めました。

「私が日本語を話すことができるのは、パラオが昔、日本だったからです」

「えっ、日本だったって、どういうことですか？」

「第一次世界大戦が終わったとき、当時の国際連盟から委任されて、パラオ諸島は日本の委任統治領になったのです。私の小さいころには、パラオにも日本人がたくさん住んでいて、何もなかった私た

ちの小さな島にも、学校や発電所を建ててくれたのです。私が日本語を話せるのも、小学生のときに日本人の先生から教えてもらったからなんですよ。今でも『ダイジョーブ』や『ベントウ』、『ダイトウリヨウ』といった日本語がパラオ語として使われていますし、国旗も日本の国旗を模したものです」



パラオと日本の間に、そのような歴史があつたことを何も知らずにパラオ旅行に来ていた健太さんに対して、老人はさらに話を続けました。

「私たちは、当時の日本人から正直、勤勉、誠実といったことを教えてもらったんですよ。私は君のおじいちゃんやおばあちゃん世代の日本人にお世話になつたから、困っている日本人が港にいることを聞いて、放っておけなかつたのです」

親切な老人のおかげで、無事に帰国便に乗ることができた健太さん。会つたこともない大阪のホストファミリィ、そしてパラオに住んでいた昔の日本人のおかげで、二度の窮地を救われ、無事にパラオでの旅行を終えることができたのでした。



# 感謝の気持ちで親切や思いやりに変えて

帰国した健太さんは、家族で夕食を囲みながら、パラオ旅行について話をしました。スキューバダイビングで潜った海の美しさやジャングルツアーで見た大きな滝、そして話題はパラオでの二度の危うい出来事の顛末にも及びました。

健太さんの父親はその話を聞いて言いました。

「そうだったのか。健太はとてもいい経験をしてきたなあ。大阪のホストファミリーと昔の日本人の親切が巡り巡って健太のところに回ってくるなんて、すごい話じゃないか」

「でも、恩返しと言っては大きすぎだけ



ど、親切にしてもらったのに、きちん

とお礼をすることができなかつたのが、ちよつと心にひつかかつているんだ。船で送ってくれたおじいちゃんに、お礼の気持ちを含めてお金を渡そうと思つただけど、受け取ってもらえなかつたし、空港職員の人にはパラオから帰るときに渡そうと思つただけど、休みだつたよ  
うで……」

「確かに、その場の一度だけの出会いでお世話になつた人に、直接お返しをすることは難しいかもしれない。でも、ほかにも方法があるんじゃないかなあ。

そう言えば、健太のおばあちゃんが亡くなつたとき、お寺の住職さんがこんな話をしてくれたんだ」

そう言うとき父親は、住職から聞いた話

を始めました。

——仏教では、すべての物事は、直接的な原因の「因」と間接的な条件の「縁」によつて成り立っていると考えます。例えば、花が咲くということは、種という直接的な因と、水・光・空気などの間接的な縁があつて、はじめて可能になるのです。最初に因があり、そこに縁が働いて結果が出ます。そして結果がそのまま結果として終わるのではなく、また新たな因となり、新たな縁が加わつて次の結果が生まれるのです。

私たちの巡り合いも、因と縁によつてもたらされた結果ですが、巡り合いの糸のつながりは、私たちには見えないだけです。あなたが亡くなつたお母様から受けた深い愛情も、因と縁によつて運ばれ



できたものです。ですから、その与えられた恩恵おんけいを新たな縁に乗せて、次世代や周囲の人に運んで、あなた自身が人に喜ばれる人間になることがお母様に対する立派な親孝行になり、恩返しになるのではないですか——

「お父さんは、その話を聞いて、それからは亡くなつた健太のおばあちゃんへの感謝の気持ちを周りの人たちへの親切や思いやりに変えていこうと思つたんだ。

健太のパラオの体験は、まさに見知らぬ多くの日本人の因によって、現地の人たちとの縁が生まれた話だ。その結果、健太は親切と善意の心を受けたんだ。見えない巡り合いの糸があつたんだな、きつと。

パラオの人にお礼の気持ちを直接伝え



られないけれど、今度は健太自身が、その感謝の心を新たな縁に乗せて周りの人に伝えたらどうだろう。それがパラオの人たちへの恩返しになるんじゃないのかなあ」

父親からそのように言われて、健太さんは個々人や国境を越えた、大きな善意のつながりを感じたのでした。

# 善意を周囲の人に伝えていこう

夏休みが終わり、普段ふだんの学生生活に戻った健太さんは、父親からの話を聞いて、「自分が受けた善意を周囲の人に伝えていこう」と心に決めました。普段ならば、お年寄りが重い荷物を持って階段かくだんを上っている様子を前にして、「今こそまさに善意を伝えるチャンスだ」と考えるようになり、声をかけることもありました。

「荷物重そうですね。よろしければぼくが荷物を持ちましょうか」

「ありがとうございます。ほんとうに助かります」  
今までは少し恥はずかしいと思つて、ためらっていた小さな親切を、「善意を伝え

る」という意識いしきが後押あとおししてくれるようになっていったのです。

そして、大学のキャンパス内でもこれまで見過みすごしていたことがありました。それは、たくさんの留学生がいるということでした。

「よしつ、自分も留学生のお世話をさせてもらおう」

健太さんは早速、留学生を支援しえんするボランティアサークルに登録とうろくして、留学生のためのバザーやスポーツ大会、友好パーティーなどさまざまな文化交流に取り組んでいったのでした。

# 「いっども」「ふいっども」「だれども」

もちろん、直接に親切を受けた人に対して、礼儀<sup>れいぎ</sup>を尽くしてお礼を伝えることは大切なことです。けれども、自分の祖先や、過去の先人<sup>せんじん</sup>先輩<sup>せんぱい</sup>、また、見知らぬ

多くの人々から受けている恩恵を考慮<sup>めく</sup>みれば、それこそ有形無形の大きな恵みを受けていることになり、到底<sup>とうてい</sup>すべてを返しきれものではありません。ですか

ら、少しでも受けた善意や恩恵に感謝し、あらたな善意のつながりを次世代や周囲の人に広げていくという考え方が大切ではないでしょうか。

例えば、健太さんのように旅先で名前も知らない人から受けた親切を、今度は自分が留学生のお世話をすることで返す。自分を育ててくれた会社の先輩や上司から受けた恩を、今度は後輩<sup>こうはい</sup>を育てることでお返しをしていく。日ごろお世話になっている人に感謝の気持ち伝える、近所の人にいつもより笑顔<sup>えがほ</sup>で接する、お年寄りに席を譲<sup>ゆず</sup>る、といったこと





も、今まで受けた数多くの善意や恩恵に報いていくことになります。

親や恩師、先輩から受けた善意を返しきれなかった、親切にしてもらったのに相手の連絡先も分からないといった場合でも、その感謝の心を他人への善意として伝えていくことができます。そして、それは「いつでも」「どこでも」「だれでも」行うことができるのです。

親切な言いや思いやりの言葉といった善意は、目には見えませんが、あたかも物質ぶつしつが存在しているかのように、受けた人の心の中に残ります。善意の心はさらに善意の心をはぐくんでいきます。そして、一人ひとりの善意が少しずつ社会に広がり巡ることで、より良い社会が生まれてくるのではないのでしょうか。